子どもたちに忍び寄る情報社会の影の部分の実態と求められる情報教育
～情報化の波に押し流されない児童・生徒を育成するために～

北海道教育大学函館校大学院教育研究科
学校教育専修　4953　佐々木　朗

研究の概要

本研究では、従前行われてきたコンピュータを使った「情報教育」の華々しい実践発表から視点を変え、今子どもたちに忍び寄ってきている情報社会の影の部分に対する情報倫理の指導にスポットを当てた。そこで、子どもたちを取り巻く情報機器の実態を把握すると共に、これからの時代を生きる児童・生徒に身につけさせたい「情報活用能力」について教育実践を行い、内容を検証していく。

論文は、①現在までのコンピュータの普及、学校教育における利用の流れ、②小・中学生とその保護者の情報機器に対する実態と意識調査、③その結果を受けての子どもたちに今必要な「情報活用能力」、とりわけ「情報社会に参加する態度」を育成する検証授業、の大きな３つの柱を立てまとめていく。

本構想発表会では、情報教育の流れと、実態調査の概略、今後の授業計画について述べる。

１．情報教育の流れ

1995 年の windows95 が発売になったことが大きなきっかけとなり、コンピュータは一般ユーザーにも手が届くものとなった。現在と比べると性能は、非常に低いものではあったが、マウスで手軽に操作できることもあり、急速にユーザーは増大していった。また、それと時を同じ頃として、閉じられたパソコン通信の世界から、インターネットの世界への接続も普及し始めた。電話回線への接続から始まり、今ではその数千倍の速さがでるブロードバンドが当たり前の時代になっている。

一方、教育界においても、平成 3 年度に当時の文部省より、「情報教育に関する手引き」が出され、学校においても、児童・生徒に学ぶべき新しい価値として「情報活用能力」を位置づけられた。中学校の技術家庭科においては、選択できる領域の一つとして「情報基礎」新設され、また地方交付税の優遇措置などもあり、中学校のコンピュータ整備が進んだ。小学校においても、情報機器に対して「慣れ、親しむ」ことが目標として掲げられ、導入が進んでいった。

さらに現行指導要領では、小学校では、コンピュータを有効に活用することが求められ、中学校では、新しい領域「情報とコンピュータ」が必修として現れ、高等学校においては、教科「情報」が新設された。このような一連の流れの中、学校においては、児童・生徒を積極的に機器に触れさせ、インターネットやメール、テレビ会議システムなどを利用した課題解決学習や交流学習、プレゼンテーションソフトを使って発表をまとめるなどと、様々な活用を図って、情報教育の推進に努めてきた。

このように我々は、情報機器の積極的な活用を軸としながら、情報教育の推進に努めてきた。

２．携帯端末とインターネット

以上述べてきたように、学校教育において積極的な情報教育を進めてきた。ところが、学校教育とは違う次元で、子どもたちの情報機器の利用は確実に進んでいった。

1995 年を大きな区切りとしてコンピュータの普及のことについて触れたが、当時はまだ、パソコンはそれ自体にとても興味があり、また仕事でどうしても使わなければならない人が手に入れるような物であった。ところがその流れが大きく変わったのは、2000 年のことである。携帯電話の普及に相まって、特に若年齢のユーザーは携帯電話が「電話」から「インターネット端末」になり、あっという間に普及した。また、パソコンが一般家庭に普及したことから、子どもが自分自身のパソコンを持つようになり、インターネットに接続するようになった。

親が、また世間が知らない間に、子どもたちは、携帯端末で、また家のパソコンから、インターネットを通して積極的に子ども同士のネットワークを広げるようになった。文字という気軽さがあって、クラスの友だちからそのまた友だち、近くの友だちから紹介してもらった遠く離れた新たな友達へと、子どもたちのネットワークは広がっていく。さらに、自由に持ち運べる携帯端末では、場所を気にすることなく、また、授業時間を除くあらゆる時間にネットへ入ることができるようになった。

ネットを活用している子どもたちにとっては、インターネットへアクセスすることは、完全に生活の一部になっており、それなしでは、やっていけない状況であると断言できる。

このような状況の中、子どもたち同士のネット上のトラブルも発生している。「なりすまし」、「荒らし」などの新語もできるほど、子どもたちのちょっとした感情のもつれから、ネットの世界で傷ついている子どもも出てきている。また、ネット依存症という言葉になろうか、放課後のほとんどの時間をネットと共に過ごし、現実の自分とは違った人間として、ネット上で振る舞い、自己表現をしている子どもたちも増えてきている。さらには、匿名性を武器としながら、悪意のある大人たちは、巧みに少女たちに働きかけ、お小遣いや食事などをちらつかせながら近づき、子どもたちを騙し、性の欲求を満たそうとし、また、そのような出会い系のホームページなどを作成し、儲けを得ようとしている。子どもたちも、このようなインターネットの危険性を知らないわけではない。しかしながら、大人たちの計略に引っかかってしまうのである。加えて、子どもたち自身がお小遣いほしさから、インターネットを使い、若い性を売り物にして、お互いの名前、住所も明かすことなく、売春行為が成立するという報告も数多い。

以上概略を述べたように、子どもたちの生活にネットの世界が入り込んできており、この傾向は今後一層進むことは間違いないであろう。子どもたちの保護者はもちろん、我々教員もこのような実態を他人事ととらえる時代ではない。子どもたちの現状を明らかにすると共に、今こそ「ネットの影の部分」への指導に本腰を入れていかなければならない時なのである。

３．実態の調査

このように学校を離れてのインターネット(最近の言葉で「アフタースクールインターネット」)に対して、筆者は、道南の小学生４年生から６年生及び中学生について、及びその児童・生徒の保護者について実態調査を行った。

調査は、昨年の１１月に七飯、大野、上磯の３町及び函館市の小学校８校、中学校５校について、無記名で行い、６割程度の回答を得ることができた。

そのまとめについては、別紙にあるとおりである。

概略として、携帯電話の所有に関しては、いずれの学年も男子に比べて女子の率が高く、中３女子で半数を超えている。パソコンに関しては、いずれの校種とも子ども専用は５％前後であるが、家族と共用しているものも含めると普及率は６割以上となっている。

今回の調査では、影の部分の具体的な事例は読み取ることはできなかったが、特に中学生のメールについては、依存症状を示している回答もあった。

一方、保護者からは、このようなアンケートを取って初めて、携帯電話やパソコンの危険性を認識したという感想もあった。また、このような機器に対する家庭での指導の重要性、学校での指導を求める声も聞くことができた。

子どもたちからも、ネットショッピングや出会い系、危険情報、ネットへののめりこみなど、ネットに関わる心配事に対しての関心があるという声は高かった。

以上のような調査結果から、子どもたちがこれからの情報社会と上手に付き合っていくためには、家庭での携帯電話やパソコンの使い方のしつけをしっかりすることが大切であることがわかった。そして、学校においても、情報社会の影の部分に十分に目を向け、情報社会に生きる子どもたちに、その中にある落とし穴に埋没することのないよう、意図的・計画的に指導をしていくことが大切であることがわかった。

４．指導計画の作成と授業実践

これらの実態調査から、携帯電話やインターネットに興味を示し始める小学校段階から、「情報活用能力」、とりわけ「情報社会に参画する態度」の育成については、非常に大切なものと考える。

そこで、情報教育は、教育活動全体に対して行っていくものであるが、特に、計画的に行う総合的な学習の時間における指導計画を整備していく。

同時に、検証授業においては、ネットを使って子どもたちが陥りやすい場面にはどのようなものがあるのか間接体験をさせながら示していく。シミュレーションを取り入れて、実際に子どもたちが、日常の常識を逸脱したと思われる場面に遭遇した場合どのような行動を取ったらいいのかを話し合いを通して深めていく。

５．最後に

今後ますます発展する情報化社会、そして子どもたちを取り巻く環境も確実にその影響を受けている。本研究を通して、多くの保護者や教員がこの実態に気づいてほしいという願いと共に、情報教育を研究分野とする実践者の一人として、これからも子どもたちの情報活用能力を高めていくことに力を注ぎたい。